

かたりべ50

豊島区立郷土資料館だより

「駒込のつつじ・今昔」

今年もJR駒込駅ホームの土手のつつじが美しく咲いて、乗客の目を楽しませてくれました。

ところで、豊島区域におけるつつじ栽培の歴史は古く、明暦二（一六五〇）年霧島山（鹿兒島）のつつじ三種（真赤な紅霧島）が江戸・染井（現・駒込二七七



丁目一帯）の植木屋・伊藤伊兵衛のもとに来てから、本格的なつつじ栽培が始まります。

つつじは育てやすく、新種を作ることも容易だったため庭木として普及し、三代伊兵衛（三之丞）が元禄五（一六九二）年に著した「錦繡枕」には、つつじ一七三種、さつき一六三種が紹介されています。伊兵衛の庭園は霧島つつじの名所となり、「染井のつつじ」は一躍有名になりました。

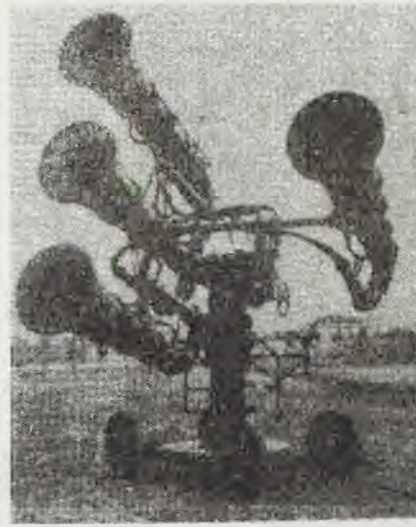
その後明治になって衰退しますが、明治四三（一九一〇）年一月一日に駒込駅が開業したのを記念して、翌年付近の植木屋・春日辰五郎が発起人となり、有志が内回り土手に数種類のつつじ百株を植樹し、「駒込駅のつつじ」が誕生します。

大正二三（一九二四）年には東口開設を記念して近隣住民や駅職員らが外回り土手に百株を寄贈し、その後車夫組合や町会など多くの有志らによる植樹や駅職員の手入れによって、駒込駅はつつじの名所となりました。戦時中も戦災を免れ、最盛期の昭和五〇年頃にはつつじ七四〇株・さつき一一六株と記録されています（駒込駅長・篠崎宏「駒込駅、つつじ・さつきの今昔」一九七三年）。

現在駒込駅のつつじはピンク色の大紫が中心となり、株数もやや減ってきたようですが、地域の人々によって守り、育てられてきた駒込のつつじはまさに豊島区の生きた文化財といえるでしょう。

※7月中旬まで伊兵衛の庭絵図や園芸書等のミニ展示「駒込のつつじ」を行なっています。 [横山]

郷土資料館では、毎年、戦争を語り継ぎ、引き継ぐための催物を行ってきました。今年も、収蔵品展として、二つのテーマで開催しています。「空襲と防空」は当館所蔵の当時の関係文献から日本の防空論の問題点を考えてみようとするものです。その問題点の一部を次に紹介します。



このスーザホンかチューバみたいなのをいくつも並べたようなものは何だかわかりますか？ これはチョウオンキです。いえ聴診器ではありません。聴音機です。もっとも聴診器の巨大化したものといえなくもありませんが。飛行機の爆音を聴いて、その方角や距離を知るためのものです。敵の飛行機による空襲を防ぐため

に考え出されました。（写真は「軍事と技術」一九三三年六月号より）

今ではレーダーなどで簡単に分かるものですが、第二次世界大戦（アジア太平洋戦争）の中期頃までは、各国ともこの器械を使っていました。日本の防空関係の啓蒙書や専門書でも、必ず登場しています。その他、複数の気球に網をつけて揚げ、敵の飛行機の進路を妨害するとか、川などを覆ってわからなくしたり、有名な建物の偽物を造って敵を混乱させたり、という漫画みたいな作戦が大まじめでとりあげられています。

飛行機が戦争に使われるようになったのは、第一次世界大戦の時からですが、今までの兵器とは異なり、防御が非常にむずかしく、各国とも対策には苦慮しま

した。

新兵器を手にした勢力は、敵に打撃を与えることが可能になると同時に、その威力が巨大であればあるほど、自分たちもまた、その威力に恐れおののかざるをえないという二面性をもっています。

一次大戦の後、将来は航空戦の時代になることが、予想されていました。日本軍も中国侵略の過程で、錦州、南京、重慶などへの都市空襲を行なっています。ですから、当然、日本自身が空襲を受けることも想定し、早くから対策を進めていたのです。

アジア太平洋戦争の初期の日本の優位が崩れ、守勢局面に入った後の一九四三（昭和一八）年一二月に発行された「防空総論」（河出書房、国民防空叢書の一冊目）で、加藤義秀（防衛総司令部参謀）は、次のように嘆いています。

防空に対する施策は従来動ともすれば、近視眼的な視野から、結果より批判さ

れる傾きがないではなかった。一回しか本土空襲はなかったではないか。而もちっぽけな空襲に過ぎなかったではないか。空襲判断が違ったではないか。こんなに訓練を重ねる必要はなかったではないか。そんなに都市の防空設備を整へる必要はないではないか等々。かかる俗耳に入り易い批評がどれほど防空の進歩を妨げたことか。

せっかくの防空施策や防空演習が民衆の間に浸透しきっていない、というわけです。

加藤のいう「俗耳に入り易い批評」に次のような言は入るのでしようか。

ロンドンや重慶のやうに、連日連夜の猛爆を受けることは、わが忠勇なる陸海軍のある限り絶対に考へられませんが、連日連夜ではありませんが、それでも時たま、国内全体を通じて大都市に対しては数回乃至十数回、中小都市に数回ぐらゐの空襲は受けるでしょう。

情報局発行の「週報」二五六号（一九四一年九月）に掲載された「家庭防空の手引き」の一節です。「週報」は大政翼

賛会・町内会・隣組を通じる国家施策の民衆への徹底のための雑誌です。そこでは「近代戦に空襲は必至」としながらも、日本にはほんのわずかでしかない、といっているわけです。

これは結果からすれば、全くの根拠のない樂觀論であったわけですし、一般民衆の空襲への危機意識を低めるものであったでしょう。しかし、この手引きは、空襲対策を一般家庭で（隣組を通して）

いかに行なうかのものです。そこに、こうした「俗耳に入り易い批評」的な言が登場するのは、どういうことでしょうか。

新兵器の威力が巨大化し、その実態が知れ渡れば、一方で反戦非戦ないしは厭戦の気分が広まるのは当然です。それを避けて、民衆を戦争に参加させるためには、新兵器が相手には打撃を与えることがあっても、味方にはそうでない、という何を何らかの程度、言わざるをえない、これもまた、避けがたいことだったのでしよう。

♡ ♡ ♡ ♡ ♡

「疎開地の子どもたち」は、当館の



【川原淑江氏提供】長野県上山田村千曲館の西巣鴨第三国民学校の疎開学童

童疎開調査のなかでご提供をいただいたたくさんの方の写真を展示しています。なぜ、こんなにたくさんの方の写が残されたのか、そんなことを考えながら、写真のかたるものを読み取っていただきたいと、思います。

「あおき」

◆期間 九月一八日まで（毎月曜・第三日曜・祝日・七月二一日は休館）

「無言館」のこと、

そして豊島区ゆかりの

戦没画学生たち

きっかけは二枚の絵はがきでした。日

本画家故山田申吾氏の妻、千代さん寄贈の美術絵はがき（七頁参照）の中にあつて、資料そのものからの情報が少なく気に懸かっていたものです。通信面に「浜田清治遺作」とあり、水彩で描かれた一枚は頭上に果実籠を載せた少女像に「カ

ンボチャ

少女」の

文字入り

（写真A

）、もう

一枚は風

景で「サ

イゴン

佛蘭西街

露天バー

と題されています（写真B）。南方風俗

画で遺作ならば戦死者のものであろうと

見当はつきますが、それ以上は何もわか

りません。

無言館を訪ねて

一方、昨、平成九年五月長野県上田市に、戦没画学生の作品を集めた無言館が

開館し、これが「芸術新潮」同年七月号

特集に「おおいに語れ戦没画学生・未完の夢」として取り上げられました。その中に浜田清治の名を見つけ、更に豊島区と接点を持つ画学生が少なからずいることを知って、梅雨の明けた頃出かけてみました。信州の鎌倉と呼ばれる塩田平を

一望にする前山寺

（ここは戦争末期

に仰高東国民学校

―現駒込小学校―

が集団学童疎開を

したところです）

の山門脇に、天折

画家達の作品を集

めた「信濃デッサ

ン館」があります。

そこからやや東寄

りの小高い丘の上に、まるで僧院のよう

な建物が立っていて、これが無言館です

た。信濃デッサン館館主窪島誠一郎氏が、

全国から寄付金を募って上田市から土地

の提供を受け、その分館として建設した

ものです。



A

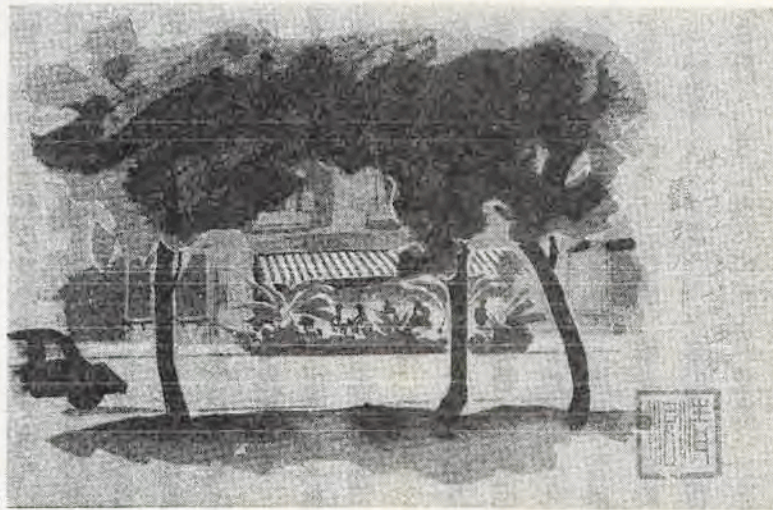
重い扉を押して中に入ると、明るい陽光や濃緑の草いきれとは一転して、しんと静まったほの暗い空間には傷みの目立つ作品群が並び、作者自身の、或いは彼等の周囲の人々の、さまざまな想いが立ち昇ってくるような、それはまさに鎮魂の館と呼ぶしかない記念館でした。

ここには開館時で三一名の戦没画学生の作品と遺品類が遺族等からの寄託という形で収められていて、前述の二枚の絵はがきも展示ケースの一隅に、ひっそり置いてありました。しかし館内を一巡して図録代わりのビジュアルブック「無言館」（講談社ルピナス・シリーズ）を購めても、もうひとつ疑問が解けません。

野見山暁治氏らの情熱

その後、この無言館の構想は、昭和四九（一九七七）年秋NHKで制作放映された「文化展望・祈りの画集」を契機に、その内容をさらに発展・集成了た形で五年に刊行された「祈りの画集・戦没画学生の記録」に端を発していることが判明しました。著者はかつて長崎アトリエ村の一つ、さくらが丘パルテノン（現豊

島区长崎二丁目二五・二六・三〇番地付近）に住み、自らも出征体験を持つ画家、野見山暁治氏と他二名。野見山氏等が、



B

氏と東京美術学校（現東京芸術大学）で同窓の戦没者、五三名の遺族を訪ね歩いた報告であり、志半ばで倒れた仲間への痛恨の念いのこもった画集・記録集とな

っています。それから一八年を経て、今度は窪島氏が野見山氏の協力を仰ぎ、国中に散らばる遺族等を再び訪ね歩いて、ついに完成させたのが無言館です。収蔵の三一名中、二八名が東京美術学校出身、一名が多摩帝国美術学校、残りの二名は独学の人という構成です。「祈りの画集・戦没画学生の記録」に重なるのは二四名に過ぎず、一八年の歳月は過去に記録された遺族・遺作にも計り知れぬ影響を及ぼしていることが窺われます。

浜田清治の絵はがき

さて、冒頭絵はがきの作者浜田清治は、大正三年千葉市生まれ、昭和九年東京美術学校日本画科入学。生家は裕福な商家で兄が家業を継いでいたため、湯島に下宿し余裕ある学生生活を送って、一四年首席で卒業。山田申吾とは同門の結城素明に師事し、同年第三回大日美術展で大日賞一席、第三回文部省美術院展に初入選と画家としての第一歩を踏み出しています。しかし翌一五年一月には応召、一七年一月マレー半島ジョホール州バクリにて戦死、二七歳でした。戦没の年に私

家版の「遺作集」が上梓され、その巻頭に置かれたのが戦地から送られてきた葉書の複製であるこの二葉だったということです。

豊島区ゆかりの戦没画学生

一 東京美術学校出身者

次に豊島区に何らかの接点を持つ画学生を抜き出してみましよう（主として先述の「芸術新潮」特集記事より）。

◆日高安典 大正七年種子島生まれ。昭和一二年油絵科入学、アトリエ村の一つに住む。一六年一二月繰り上げ卒業、一七年入宮。満洲を経て南方に向かう。二〇年四月ルソン島バギオにて戦死、二七歳。今でも生家では実弟が、兄のアトリエから持ち帰った遺作を大切にしている。

◆太田章 大正一〇年東京日本橋生まれ。本郷中学（駒込にある現本郷高校）四年修了の最年少で昭和一三年日本画科入学、一七年九月繰り上げ卒業。一八年入宮、一九年五月満洲牡丹紅省東寧で行軍中倒れ戦病死、二三歳。一流の友禅染下絵師だった父譲りの練達な写生図などが、弟妹の手に大量に残っている。

◆高橋英吉 明治四四年宮城県石巻市生まれ。昭和六年彫刻科木彫部入学、一一年卒業。一五年澄江と結婚、池袋のアパートへ平和荘で新婚生活を送るが住居とは別にアトリエを借りて通っていた。

一六年一〇月応召。南洋各地を転戦、一七年一二月ガダルカナル島にて戦死、三歳。彼の作品の大部分は石巻文化センターの所蔵となって展示室も設けられている。また作品紹介の「青春の遺作 高橋英吉 人と作品」、「遺作写真集・高橋英吉」といった刊行物も出ている。

◆前田三千雄 大正三年神戸市生まれ。昭和七年日本画科入学、一二年卒業。三越百貨店美術考案部に就職。一三年一月応召、中国各地を転戦し一七年一二月召集解除。翌一八年絹子と結婚、一年間の新婚生活を渋谷区大和田で送る。一九年再召集されて二〇年八月、ルソン島東北部山中で戦死、三四歳。戦地からの絵入りはがきなど、数百点が妻の手に保存されている（妻への宛先が豊島区日出町となっているものも多い）。

◆佐久間修 大正四年熊本県生まれ。昭和九年油絵科入学、一四年卒業、池袋の名曲喫茶「セルパン」に勤めていた静子と結婚。大阪で美術教師をしたが肺浸潤となって帰郷。郷里の中学の教員となり、長崎の海軍航空廠へ勤労働員の生徒を引率して行った一九年一〇月、B 29からの直撃弾を受けて死亡、二九歳。

◆高橋助幹 大正七年茨城県生まれ。昭和一三年日本画科入学、一七年九月繰り上げ卒業。同年一二月応召、一八年結核で陸軍病院に入院後除隊。その後再発、二〇年一二月病死、二七歳。野見山氏とは同じアトリエ村の住人として交流があった。「折りの画集・戦没画学生の記録」の文章がそのまま「長崎アトリエ村史料」（一九八七年・豊島区立郷土資料館刊行）に再録されています。

今のところ、この六名しかわかりませんが、池袋モンパルナスとも呼称され、上野へも通い易く、地方出身の画学生が安い家賃で独立したアトリエを持てたこの地区には、無言館収蔵者の中でも、もっと多くの画学生が住んでいた可能性が多分にあります。

また、戦後三〇年の時点で、既にキャンバスもスケッチブックも作品類が全く残っていないかったという、野見山氏のアトリエに転がり込んで居坐った年上の同級生、佐々木四郎も、昭和一七年九月繰り上げ卒業と同時に応召、二〇年八月ミシダナオ島で戦死しています。彼の入営帰郷の際、リュックを放り、下駄を飛ばしてチャカホイを踊りつつ見送る人々の視界から消えていった情景が、野見山氏の名文で活写されています。「祈りの画集」には他にも練馬のアトリエ村に住んだという画学生の記録も二、三見られます。

帝国美術学校と「長崎派」

ところで、東京美術学校以外にも当時各種の美術教育機関が存在しましたが、それらの出身戦没者について調べたものはあるのでしょうか。

小沢節子著「アヴァンギャルドの戦争体験 松本竣介 瀧口修造」そして画学生たち（青木書店刊）はその一つに数えられるものです。ここでは帝国美術学校（現・武蔵野美術大学、多摩美術大学

の前身）で学んで昭和初期に前衛芸術運動に携わり、後に戦没した画家たちの軌跡が検証されています。彼等の日常の生活圏は、学校所在地の関係から阿佐ヶ谷・高円寺・新宿などのいわゆる中央沿線文化圏でしたが、芸術活動の面では、「長崎派」と呼ばれた池袋モンパルナスの画家たちとは浅からぬ交流があり、独立美術協会展や創紀美術協会展への出品を経て、昭和一四年、共に美術文化協会を創立しています。しかしこれはまた別の問題であり生前の活動が各地の美術展などで紹介され、作品も公的機関に残されている幸運な例といえるでしょう。

同じく戦病死した鬘光のようにその画業で評価されている画家の場合も、現在に至るまでには作品や資料の掘り起こしに様々な苦労があったに違いありません。戦没画学生に関する資料の収集

無言館は、館主の夭折の画家へのこだわりと、「祈りの画集」という先行の記録があったからこそ開館にこぎつけられたのであって、戦後五〇年を経た今、新たな発見は困難とも思われますが、各出

身地での地道な調査によってあきらかにされた事例もいくつあることですから今後もアンテナを張っておく努力は必要でしょう。事実、無言館には開館後も続々と戦没画学生に関する情報や資料が寄せられ、収蔵品も増えつづけているという事です。

最後にひとつ情報があります。京都の立命館大学「国際平和ミュージアム」に於いて、今夏（七月一日〜一七日）無言館開館記念事業として「戦没学生「祈りの絵」展」が開催されます。どのような内容の展示になるのか期待と関心がかかります。

「小池」

「かたりべ」37号（一九九五年三月発行）では、「絵はがき」は語る」と題し、故山田申吾氏の足跡と作品について記しています。〈長崎アトリエ村〉との関連についても触れていますので、ご参照ください。

一九九八年度事業のうち、収蔵資料の展示（年4回）についてご案内します。

①「疎開地の子どもたち」「空襲と防空」

期間：六月九日から九月一八日

当館で例年行なっている、戦争体験を語り継ぎ、引き継ぐための催しです。今回は、今までご提供していただいた資料（例えば疎開学童の記念写真）に、新しい視点の「空襲」と「防空」に関する館蔵資料を加えて展示しています。なお、展示期間中には、部分的な展示替えを予定しています。

②トラム（路面電車）とメトロ（地下鉄）

期間：九月二六日から十一月一日

かつては、都内を縦横にめぐっていたトラム。今は、それがメトロに変わりました。今回の展示では、都市交通のあり方を考えるきっかけを提供いたします。なお、今展示は、北、新宿、板橋の各区との合同企画によるものです。各区では、展示内容に関して独自の切り口を用意し

ていますが、豊島区は、「軌道・無軌道、地下鉄道」でいこうと考えています。

③仮称「トキワ荘」II

期間：一月一日から一月中旬

当館では、一九八六年に、特別展「トキワ荘のヒーローたち―漫画にかけた青春―」を行ないましたが、最近、その展示の際にご協力いただいた漫画家たちのなかで、複数の方が相次いで亡くなりました。早い時期に「漫画文化」について取り上げてきた当館としては、再びそのことに触れてみようと思案しました。

「会いたかった作品の主人公に再会できる」機会でもあります。

④仮称「職人展（組紐の技術）」

期間：一月中旬から三月末日

日本の伝統工芸のひとつとして長い歴史をもつ組紐。これは、職人さんの「糸を組む」という技術によって生まれるものです。古くは鎧兜（よろいのかぶと）の一部分に、その後男物の羽織紐や女物の

帯締めにと、用途を変えながらも技術は受け継がれてきています。今回の展示では、組紐の職人が池袋周辺に多数集住していたこと、そしてその高水準の技術を今日へ伝えていくことを、職人さんが使っていた道具とともに紹介します。

短編 集後記

郷土資料館が定期的に発行してきた「かたりべ」は、一九八五年一月一日に創刊号を出して以来、今回で五〇号を迎えることとなりました。読者のみなさんのなかに、第一号から継続してお読みになられているという方はいらっしゃいますか？既刊号を振り返って見てみると、当館の事業活動が、その時代の社会状況の影響を受けているということがよくわかります。各号が四、六、八頁という小さな読み物ですが、合本にして多くの人の目に触れる等、方法を考えてみたいと思います。「福岡」

か たり べ

Na 5 0

1998年6月19日

豊島区西池袋2-37-4

電話03-3980-2351

発行/印刷
豊島区立郷土資料館